

彼の女装と 僕の女装

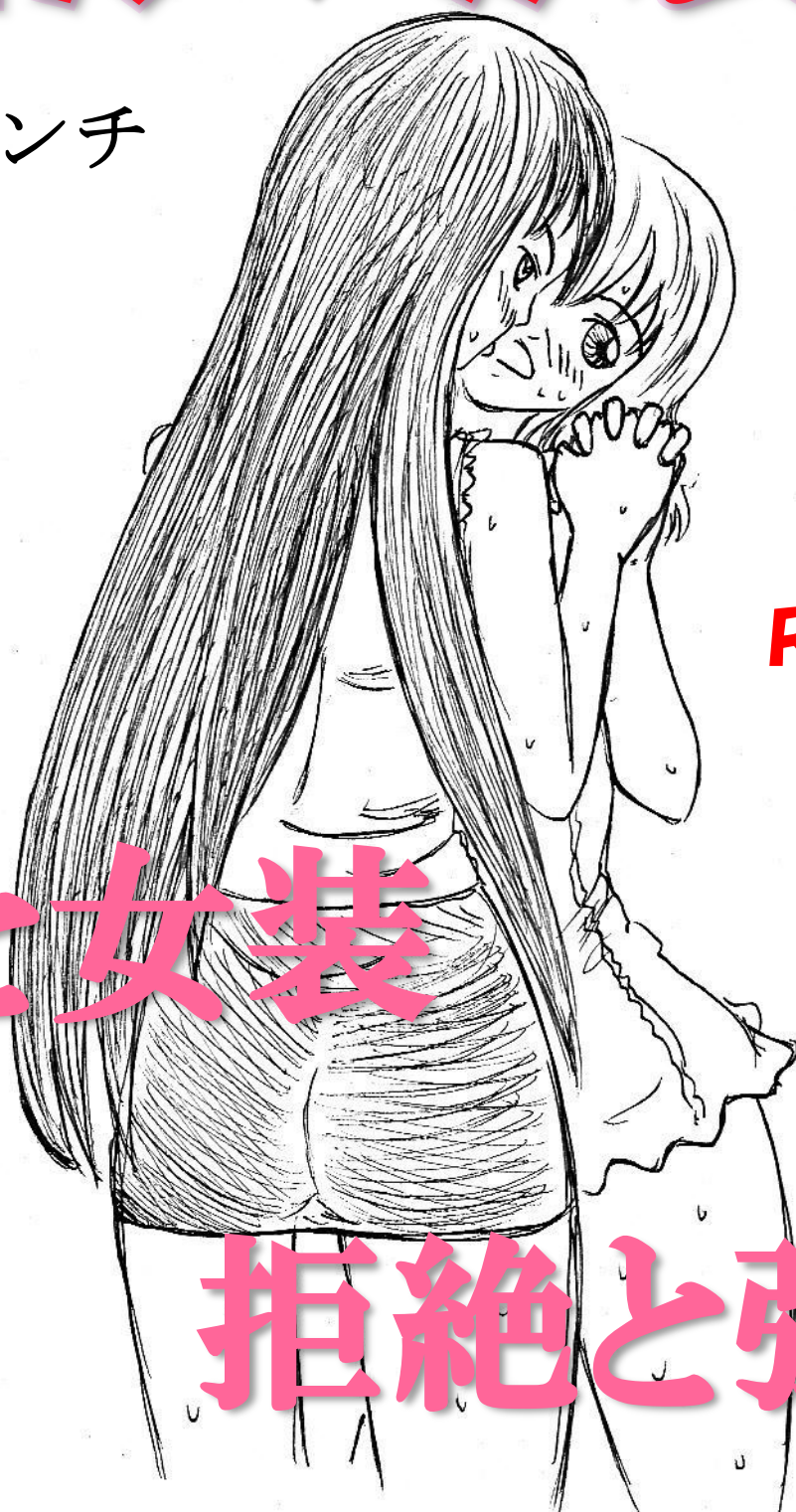
二角レンチ

体験版

R-18

恋と女装

拒絶と強要



目次

オナニーを覚えてもらう	3
原作利用権について	37
プリンタでの印刷方法	39
奥付	40

オナニーを覚えてもらう

僕は最近エッチなことに興味が出てきた。

女の子のことがすごく気になってきた。裸やパンツを見たいと思うようになってきた。

そういうとき、僕はパンツの中で大きくなってしまふ。でもそれをどうしたらいいのかわからなかった。

一番仲のいい友達に相談した。彼ならなんでも相談できる。どんな恥ずかしい秘密でも守ってくれる。

昔、彼の家で一緒に彼のお姉さんの服を着てみたことがある。二人とも女の子みたいですごくドキドキした。

彼は僕のことをすごくかわいって言ってくれた。うれしかった。彼もすごくかわいかった。だから僕も彼をかわいって言った。

そしたら彼がキスしようって言ってきた。僕は嫌だって言ったら彼は僕の肩をつかんで強引にキスをしてきた。

僕は彼を突き飛ばした。彼は尻餅をついてきょとんとしたあと、大声で泣きだした。

僕がおろおろしていると彼は泣きながら謝ってきた。ごめん、もうしないって言ってくれた。

だから僕も突き飛ばしたことを謝った。それきりこの話題には触れないようにした。

彼にキスされたときはびっくりしたけれど、嫌じゃなかった。彼は女の子にしか見えなくて、すごくドキドキした。

でも怖かった。ドキドキが強すぎて怖かった。嫌だって言ったのに無理矢理キスしてきた彼が怖かった。

僕らはそれを無かったことにして、その後は普通にふるまった。だから今でも一番の親友だ。

僕は最近、女の子のことが気になるようになった。そうすると、あのときの彼のことが思い出された。

すごくかわいい女の子。女の子の服を着た彼はすごくかわいかった。

かわいい子にキスされた。当時は怖かったけれど、今ではあのファーストキスはすごくいい思い出になっていた。

女の子のことが気になるようになってから、女装した彼のことも同じくらい気になるようになっていた。

彼の女装がまた見たい。そしてまた、キスがしたい。

彼は今ではカッコいい男に成長していたが、顔はとてもきれいだった。だから女装したらきっと今でも美人できれいだと思う。

でも彼はそんな気はないだろう。もう何年も前の話だ。彼はもう忘れてるに違いない。

女の子を見るとパンツの中で大きくなる。彼の女装を思い出すとパンツの中で大きくなる。

苦しい。これをどうすればいいのかわからない。僕はこの大きくなってしまう現象について何も知らなかった。

だから彼に聞くことにした。彼に相談したら、今日、彼の家で教えてくれるということになった。

彼の家に着いて呼び鈴を鳴らす。ドアが開いて彼が顔をのぞかせた。

「いらっしやい。さ、あがって」

彼はもうすっかりカッコいい男になっていた。小さい頃に女装したとき、あんなにかわかったとは思えない。

彼は母親似だ。彼のお母さんもお姉さんもすごい美人だ。彼もよく似ていて、でもとてもカッコいい。

やせていて背が高い。運動はそこそこできる。頭もよく成績がいい。いつも勉強を教えてもらっている。

彼は優しくて明るい。友達も多いし、女の子にすごくもてる。僕とはなにもかも正反対で、あこがれだった。

「今誰もいないんだ。だから挨拶はいいよ」

彼の部屋に通される。

「待ってて。今飲み物取ってくるから」

「あ、手伝うよ」

「いいから。そこに置いてある本、読んでおいてくれる？」

彼はそう言って出ていった。

彼に言われた本を手にする。

表紙はなんてことはない。でも中をぱらぱら見ると、絵がたくさん載っていた。

性教育の本だ。

顔が熱くなる。学校でも性教育は習っている。でもこれはなんだかそれより難しいことがたくさん書いてある。

文字が細かい。図が細かい。恥ずかしくて混乱して、よけいにわけがわからない。

彼がドアを開けて入ってきた。

「どう？」

「どうって言われても。なんだか、わからないよ」

彼がテーブルにお茶の用意をしてくれる。僕もそれを手伝う。

「ありがとう。いただきます」

彼のいれてくれた紅茶を飲む。おいしい。

「学校で習っているのって具体的に何のことかわからないだろ。だからそれより詳しい本ならわかるかなって」

「こ、こんなのよけいにわからないよ」

「授業で、勃起とか射精について習っただろ？」

「習ったけど。だから何？」

「あれでわからない？」

「わからないよ。何のことを言っているの？」

少しいらいらする。なんだか馬鹿にされている気がする。

僕は自分でわからないから聞きに来たのに。自分は知っているからってえらそうに。

「ペニスはわかる？」

「うん」

ペニスは男性器のことだ。授業で習った。

「教科書に書いてあっただろ。ペニスが性的興奮か性的刺激を受けると勃起して、性的快感が高まると射精するって」

なんだかそんなことが書いてあった。試験でもその単語を覚えて書いた。でも意味はまったくわからない。ただ暗記しただけだった。

「ふーん。すらすら言えるんだね」

おもしろくない。僕がパンツの中で大きくなってしまふのをどうするか聞いたとき、学校では教えられないから家で教えてくれるって言ったのに。なんで性教育の授業みたいなことばかり話すのだろう。

「女の子のことが気になるんだって？」

「う、うん」

ようやくわかる話になってきた。でも恥ずかしい。恥ずかしいから他の誰にも聞けない。絶対に秘密を守ってくれる彼にしか聞けない。

「女の子のことは見たり考えたりしてエッチな気持ちになるのが性的興奮、それが刺激になってペニスが勃起してるんだよ」

僕のペニスが勃起している？

頭を整理する。性教育と関係があるらしい。でもぴんときない。

彼がため息をついて言う。

「勃起っていうのはね、ペニスが大きくなることだよ」

「そ、そうなの？」

単語として知っていた勃起の意味を知らなかった。そうなのか。いつも大きくなるのは勃起していたのか。

「わからないよね。俺もわからなかった」

僕はうなずく。性教育の授業は難しい単語が並んでいて、テストはそれを暗記して穴埋めする。

でも具体的に何のことなのかわからない。変な断面図とかあるけれど、あれが自分のことには結びつかない。

「性教育の本はね、さっき見せた難しい本も含めてみんな同じ。難しい言葉で書いているけれど、その具体例を写真で見せない。だから何のことかわからないんだよ。実物と結びついて考えられないんだ」

たしかにそうだ。僕はちゃんと性教育を習っていたけれど、意味はさっぱりわからなかった。

「写真とか、動画とか、実物とか、本物の姿を見ないとわからないよね。本の変な絵を見てもわからないよね」

僕はうなずく。そうだ。たしかにそうだ。

「お菓子も食べなよ。お茶のおかわりいれてあげる」

彼がお茶を注いでくれる。僕はお菓子をボリボリ食べる。

彼が何も話さないなので、僕はお菓子を食べたりお茶を飲んだりしていた。

「だからね、実際に見て教わらないとわからないと思うんだ」

「そうだね」

「そうしてもいいかな？」

「いいよ。教えてよ」

僕は何のことかわからずに即答する。なんでもったいぶってるんだろう。早く教えてくれればいいのに。

「ペニスに性的刺激を与える。どうするかわかる？」

「わからないよ」

「性的快感ってどんなのかわかる？」

「わからないよ」

「性的快感が高まると射精する。射精ってわかる？」

「わからないよ。ねえ。なんなの。もったいぶらないでさっさと教えてよ」

「ペニスから精液が出るのが射精。精液ってわかる？」

「わからないって。見ないとわからないよ。性教育の本じゃわからないよ。何。教えてくれるってうそだったの？」

「教えるよ。でもね、見せても怒らないでほしいんだ」

「怒らないよ。何で怒るのさ。それよりそうやってぐずぐずもったいつけてるほうが腹立つよ。何なの。僕が知らないからって馬鹿にしてるの？」

「違う。そうじゃなくて、その、すごく、恥ずかしいことなんだ。絶対誰にも秘密にできる？」

「秘密にするよ。絶対。だからそっちも、僕が相談したこと誰にも言わないでよ」

「言わないよ。俺たちだけの秘密だ」

「うん。僕たちだけの秘密」

なんだろう。ここまで念押しするのってよっぽどだ。恥ずかしいって言ってた。誰にも言えない恥ずかしいことなんだ。

「お茶のおかわりいれようか。お菓子も食べなよ」

僕はお菓子をボリボリ食べてお茶の残りを飲み干した。

「これでいい？ さ、見せて。もういい加減、いらいらするんだけど」

彼があんまりもったいぶるから腹が立った。教えてもらう立場のくせにぎゃあぎゃあいきり立つ。

「その前に」

「まだあるの？」

この後におよんで彼が何か言い出す。ああもう腹が立つ。何なんだいったい。

「俺たちが小さい頃、姉さんの服を着たこと覚えている？」

どきりとした。彼はすっかり忘れていたと思っていたのに。覚えていたんだ。

「お、覚えているよ」

なんでその話を出すんだろう。僕があのかことを覚えていて、たびたび思い出していることがばれているんだらうか。

いくらなんでもばれるわけがない。

僕があのかときのキスを大事に思っていることや、あれが僕の初恋になってしまったことなんてばれるわけがない。

もちろん今では彼に恋しているわけではない。彼は親友だし、僕は女の子が好きだ。

「実はあのかと、姉さんの服を持ち出して着たことが姉さんにばれたんだ」

「え、そうなの？」

びっくりした。あれ以来そのことには触れないようにしていた。それに彼のお姉さんにはその後も会っていたが別段いつもと変わらなかった。

まさか気づかれていたなんて。お姉さんが気づいてて何も言わなかったなんて。

「ぼ、僕のこと何か言ってた？」

「別に」

彼の優しさだらうか。きっと僕のかことは黙っていたんだ。彼は自分だけがしたことにしたのだらう。

「それで、姉さんの服を着たことがばれて、こっぴどくしかられたあと」

彼が黙り込む。僕はごくりと唾を飲み込む。

「姉さんに、着ているところ見せろって言われたんだ」

おどろいた。ばれていただけでなく、お姉さんに見せろと言われたのか。

あのか優しいお姉さんが、弟に女装を強要したのか。

「そ、それは罰として？」

「それもあるけど……」

彼はやたらと口ごもる。でも催促すると話してくれない気がする
ので、彼が話すまで待つ。

「僕が姉さんの服を着て女装したあと」

「うん」

「誰にも言わないでね？」

「言わないよ」

「姉さんにも、俺が話したと言わないでね」

「言わないよ」

なんだかすごくドキドキする。とてもいけないことを聞いている
気がする。

「姉さんが、女装した俺にオナニーを覚えてくれたんだ」

オナニー？

なんのことかわからない。

「オナニーは知ってる？」

「知らないよ」

「そうだよ。射精も知らないものね」

かちんとくる。

「知らないから教えてって言ってるのに。何でさっきから僕を馬鹿
にするの」

「ご、ごめん。馬鹿にしてるんじゃないんだ」

彼がおろおろする。昔彼にキスされたとき、突き飛ばして泣かせ
たことを思い出す。その表情にどきりとする。

「それでね、それから俺は何度も、女装して姉さんの前でオナニー
することを強制されてきたんだ。姉さんの服を着ていたことを母さ
んにばらすぞっておどされて」

あの今でも優しいお姉さんが、弟をおどすなんて想像できない。
今でもこの家に遊びに来たときは僕にも彼にも優しいのに。

「それでね、俺、女装しないとオナニーできなくなっちゃったんだ」

彼が顔を真っ赤にしてうつむく。

「ふーん、それで」

そっけなく言う。でも内心ドキドキしていた。

彼はカッコいい。でもお姉さんに似てきれいな顔をしている。

また彼の女装が見られる？

期待に心臓が高鳴る。

「ペニスが大きくなって困ってるんだろ」

僕はうなづく。

「そういうときは、オナニーして射精するんだ。そうすれば小さくなるから」

射精。今まで単語としては知っていた。でも自分と関係あるとはまるで考えなかった。

そうか。射精すれば小さくなるのか。いつも長い時間かけてしばむのを待っていた。これからは、オナニーして射精すればいいんだ。

「それでね、オナニーはすごく恥ずかしいことなんだ。学校ではできない。人前ではできない。朝とか晩とかお風呂入る前とか、自分一人でできるときに済ませておくんだ」

へえ。そうなんだ。

「一日一回で足りなかったら二回でも三回でもしていいから。必要なだけしておくこと。いい？」

僕はうなづく。

「あらかじめオナニーで射精しておけば、女の子を見たくらいで勃起しなくなるから。そうすれば、普段勃起して困ることはなくなるよ」

なるほど。オナニーして射精しておけば、もうしょっちゅう小さくなって困ることはなくなるんだ。

「オナニーはすごく恥ずかしいことだから、絶対に誰にも見られないよう一人ですること。したことを人に言わないこと。いいね？」

「うん」

ドキドキする。そんなに恥ずかしいことなんだ。見られても知られても恥ずかしい。どんなことなんだろう。

「あれ、でも、お姉さんに見られてるんだよね？ 何で恥ずかしいことなのに、お姉さんは見たがるの？」

「女は男の恥ずかしいところを見たがるものなんだよ。そのうちわかるよ」

またいらっとくることを言われる。でもいい加減さっさと知りたいたので、いちいち突っかからずに先を促す。

「すごく恥ずかしくて、人には見せられないことなんだよね。でも僕には見せて教えてくれるんだよね。見せて。早く見せて」

彼はすごくもたもたしながら立ち上がった。

彼は部屋に備え付けのクローゼットへ向かう。扉を開けて中を見せてくれた。

そこには、女の子の服がたくさんかかっていた。

「全部、姉さんのお下がりなんだ」

僕は目を輝かせてそれを眺める。素敵な服がたくさんある。

小さい頃に一度だけ着たことを思い出す。あのときのドキドキがよみがえる。

また着てみたい。かわいい服やおしゃれな服を見て、そんなことを思った。今まで考えなかったけれど、もう一度女装したいという願望が心の底に眠っていて、それが今掘り起こされた。

「オナニーするとき、女装しないとできないんだ。だからこれを着て、オナニーするんだ」

彼はハンガーにかかっている服をぱらぱらと手で動かしながら見せてくる。僕ははっとして気を取り直す。女装したがつているなんて恥ずかしい。気づかれたくない。

彼はこれを着ているんだ。うらやましい。

彼がこれを着ているところが頭に浮かぶ。見たい。いや、今から見せてくれるんだ。

見れる。彼の女装が見れる。今顔を赤らめている彼はとてもきれいだ。きっと女の服がよく似合う、すごい美人になるに違いない。

「どれがいいかな」

「僕に選ばせて」

彼は少したじろぐ。でも横へ引いて僕に手で促す。

僕はクローゼットに近づき女の服に手を触れる。

うわー。すごくなめらかだ。男の服となんだか違うぞ。手触りがいい。薄い。やわらかい。

ドキドキする。着たいなあ。着せたいなあ。彼がこれを着たらきつときれいだろうなあ。楽しみだなあ。早く見たい。

どれがいいかな。どれもいい。なかなか選べない。どの服も見たり触ったりするのがすごく楽しい。女が店で服を選ぶようにはしゃぎながら次々手に取る。

クローゼットの端のほうに、布をかけられたところがある。そこにも服が何着か、かかっているようだ。

「こっちも見えていい？」

「そこは駄目」

穏やかな口調の彼がぴしゃりと言う。浮かれた気分冷や水をぶっかけられたようでびっくりして固まる。

「あ、ご、ごめん。でもそこは見ないで。頼む」

「何。何か教えてよ」

「い、今は見せられない服だよ。でもそのうち見せるから。今は見ないで。お願い」

「そのうちだね。約束だよ」

なんだろう。見せられない服って何なのか想像できない。でもそのうち見せてくれるなら、今はいいや。

どれにしようかな。どれもいいなあ。彼にはどれも似合いそうだ。

お姉さんのお下がりかあ。あの美人のお姉さんが着ていた服。そう考えると、触っているだけでうれしくなる。

ワンピースの服が多いけれど服とスカートが別々のものもある。組み合わせを考えるといつまでも考えがまとまらない。さっさと決めないと。

とりあえず、ワンピースの中から決めよう。どれもいいけれど、ん、どれにしよう。

どれもいいんだからどれを選んでもいい。清純そうな、シンプルな白のワンピース。でもレースの飾りとかがついていて、とてもおしゃれだ。

彼が着たらきつときれいだ。かわいい服。小さな頃に見た、彼のかわいい女装が思い出される。

これがいい。うん。これにしよう。

「じゃあ、これで」

僕はその服を取り、彼に差し出す。彼はそれを手に取りしげしげと見つめた。

「ん、じゃ、向こう向いていて。着替えるから」

「女装って、服だけ？」

「……下着も替えるよ」

「僕に選ばせて」

「え、いや、それは、ちょっと」

「なんで。いいじゃないか。ここに入っているの？」

クローゼットの下は引き出しになっている。僕は彼が止めるのも聞かずにそこを開ける。

引き出しの中には、格子状のしきりに丸まった色とりどりの布が詰められていた。その横にはブラが重ねられて並んでいた。

「うわー、すごい。すごい」

僕はブラを手にとって見る。カップは小さい。でも本物のブラだ。

「や、やめて」

彼が止めようとする。僕は彼の手をふりほどいて格子状のしきりに入った布を取る。

「おお。すごい。これが女の子のパンツかあ」

手で広げてみる。小さい。布が少ない。やわらかい。肌触りがなめらかだ。よくのびる。僕は何枚も手に取って広げてみた。

「やめて、恥ずかしいよ」

彼が顔を真っ赤にしている。少し涙を浮かべている。すごくかわいい。でも止められない。

「僕が選んであげるよ。どれがいいかな。やっぱり白の服だから白かなあ」

僕は服に似合う、レースの飾りのついた純白のパンツを選ぶ。それに対になっていると思われる白のブラを取る。

彼はすごくいやがっているからのんびりと選んでいられない。惜しいけれどさっさと決めてしまう。

「はいこれ。これ着けて」

ブラとパンツを手のにのせて差し出す。彼は僕をじっとにらんだ後、それをひったくるように奪い取る。

彼は僕が散らかした他の下着をきれいに納めると引き出しを閉めた。

「着替えるから後ろ向いていて」

その声は少し怒りをにじませていた。ちょっとはしゃぎすぎたかな。僕はごめんと謝ってから素直に後ろを向いた。

後ろで彼が服を脱ぐ音がする。その衣擦れの音を聞くとたまらなくなってくる。僕はちらりと後ろを見てみた。

彼はこっちに背を向けて着替えていた。もう服を全部脱ぎ終わっていた。

その後ろ姿はとてもきれいだった。やせていて背が高い。すらりとして美しい。

なにより、動きが美しかった。男の動きじゃない。女が服を着替える動き。どこがどうとは言えないけれど、たしかに男とは仕草が違っていた。なめらかでなまめかしい。艶っぽい色気があった。

女の子みたいだ。

この後ろ姿を見て、男か女か判断できない。それぐらいきれいだった。お尻が特に大きく見える気がする。女の子みたいにふっくらして形がいい。いつも体育の授業で見るブルマのヒップラインにそっくりだった。

すごくいやらしい。女の子の裸に思えた。

ドキドキした。勃起した。ズボンの下で大きくなった。

これが勃起だとさっき教えてもらった。僕、勃起している。いやらしくて恥ずかしいことなんだ。そう思うとますます硬くなった。

苦しい。これをどうすればいいかわからない。

オナニーして射精すれば小さくなるって言っていた。そのやり方を今から見せてもらえる。

このきれいな女の子にオナニーを教えてもらおう。そう考えるとよくわからないのにすごく興奮した。

彼が後ろ向いたまま足を上げてパンツに入れる。するりと持ち上げお尻のところできゅっと引っ張る。

あんな、一度引っ張ってくいこませるんだ。お尻にぴったりフィットする。大きなお尻を小さな布が覆う。

女のパンツがよく似合う、きれいな丸いお尻。すごくいやらしい。本物の女にしか見えない。

ブラもつける。背中でホックをつける仕草がとてもさわやかだ。なのになんでこんなにいやらしく思えるのだろう。わからない。すごく興奮する。

彼が白のワンピースに腕を通す。背中を曲げて頭からかぶる。

やばい。最後まで見ていたいけれどもう着替え終わる。僕はあわてて後ろを向いた。

「もう、こっち向いてもいいよ」

彼が後ろから声をかける。僕は首を後ろに向けてちらりと彼を見る。

きれいだった。

純白のワンピースに身を包んだ彼はとても美しかった。

背が高く、すらりとして、清楚だった。

顔は化粧していない。男のままだ。よく知っている顔のままだ。

なのに別人だった。目の伏せ方や首のかしげ方、赤らめたほほ、はにかんだほほえみ。全てが女の子だった。

顔も身体も仕草も、すべてが女の子だった。女の服を着ただけではこうはならない。どうしてここまで女の子になりきれなのか。

「きれいだ」

僕は見とれながらつぶやいた。それを聞いて、彼は一瞬すごくうれしそうにほほえんだ。

すぐに彼が口を引き結ぶ。でもまた顔がゆるんでにやける。

「ほ、本当に、きれい？」

「うん。すごくきれいだ。こんなきれいな女の子見たことない」

言い過ぎだ。美しさでは彼のお姉さんに劣る。でも彼はものすごくうれしそうに笑った。

彼のお姉さんはすごく美人だ。クールで、たのしくて、美人なのに強さがあつた。格好よくてきれい。背が高い。だから彼女のお下がりだという服を、背の高い彼が着てもサイズが合っていた。

男と女は肩幅とか腰の位置が違うから服は違う。でも彼は女の服がすごく似合っていた。どこもおかしく思えない。

彼は僕にほめられて上機嫌だった。さっき僕が勝手に下着を漁ったときの怒りを忘れてしまったようだ。浮かれてスカートのすそを持ち上げひらひら回る彼を僕は本心からきれいだとほめた。

「すごく似合うなあ。本当に女の子みたいだ」

ずっと見たかった彼の女装。小さい頃に一度だけ見たそれはすごくかわいかった。でも今は成長して、彼のお姉さんのように美人になっていた。

すごくドキドキする。小さい頃女装した彼としたキスが思い出される。あのドキドキに似ている。あの初恋のドキドキに似ている。

浮かれていた彼がはっとして止まる。そして顔を真っ赤にして座り込む。

正座するように座り、手を握ってひざに載せている。その仕草はまるっきり女の子だった。

「ほ、ほめてくれてありがとう。すごくうれしかった」

彼がぼそぼそとつぶやく。

「そ、それで、オナニー、教える、約束だったよね」

僕はごくりと唾を飲み込む。

「い、今からするから。見てて」

彼がすっと立ち上がる。そしてベッドに腰掛ける。

ひざをそろえてベッドにふとももをすりつけるようにして上がる。
ひざまでスカートに包まれたすねがなまめかしい。

彼はひざをそろえたままベッドにしなだれる。その姿はもう女の子にしか見えない。顔を赤くした女の子がベッドの上でたそがれている様は実に絵になる。

彼は僕の目をじっと見ていた。僕もじっと見つめ返す。

動悸が止まらない。これから起こる、すごく恥ずかしいことに対する期待に胸が高鳴る。

人に見せられないオナニー。それってどんな恥ずかしいことなんだろう。

女装の似合う彼の恥ずかしいところが見たい。彼女の恥ずかしいところが見たい。

僕はうずくまっていたけれど、身を起こして彼に近づく。もっと近くで見たい。ベッドのそばににじり寄る。

彼がびくりとする。僕は動きを止める。

彼がじっと見つめる。その視線は僕の顔を見ていない。もっと下を見ている。

何だろう。その視線の先を追う。そしてすぐ気づく。

僕の膨らんだ股間を見ていた。彼は僕の勃起を見つめていた。

すごく熱っぽい視線で見つめてくる。口に手を当てうっとりしている。

そんな目で見られたら、かわいい女の子にそんなふうに見つめられたら。ものすごくいきりたった。ズボンに圧迫されてずきりと痛む。僕はうめいて股間を押さえつけた。

「苦しいでしょ。ズボン脱いでいいよ」

驚いて顔を上げる。彼の声がすごく甘い。いつもの声じゃない。声を作っている。女みたいに少し高い声。なまめかしい声。色っぽい声。男とは思えない声。

口調も違う。彼はまるで女の子みたいな声を出し、女の子みたいなしゃべり方をした。

すごくドキドキする。あれ。彼、男だよな……？

わからなくなってきた。今日の前にいる彼は女の子にしか見えない。そのうえ声まで女の子みたいにされたらもう完全に女の子とは思えない。

「ズボン脱いで。パンツも下ろして」

彼に言われて素直に従う。逆らうどころか疑問も何も考えられない。顔が熱い。頭が沸騰している。もうわけがわからないくらい興奮している。

勃起していて脱ぎにくいズボンを下ろす。そしてパンツに手をかける。

ためらう。女の子に見られながら、勃起したペニスを見せる。すごく恥ずかしい。とてもじゃないけれどできない。

「脱いで。見たいの」

そうささやかれて、急激に辛抱できなくなった。ペニスをひっかけてたままパンツを一気に下ろす。

ばちん。お腹に衝撃が当たる。パンツにひっかけてたまま下向けられたペニスが、解放されたとたん勢いよく跳ね上がってお腹にぶち当たった。

驚いて固まる。まじまじと見る。

これが勃起したペニス。はじめて見た。いつもはズボンの中で大きくなったら小さくなるまでじっと辛抱していた。ズボンから取り出して見てみようと思ったことは無い。だから今まで勃起したペニスを見たことが無かった。

こんなに。ものすごく大きい。いつもトイレで用をたすときに見る小さなペニスとは似ても似つかない。

こんなに大きくなるんだ。知らなかった。窮屈なズボンの中で痛むから、ここまで全快に勃起したことが無かった。こんなにも大きくなるんだ。すごい。

上向いて、びくびくしている。お腹にくっつきそう。でもぎりぎりつかない。ほとんど真上に向いている。

びくびくと脈打っている。なんていやらしいんだ。勃起ペニスっていやらしすぎる。

思わず力が入る。そのとたん大きくびくりとふるえる。

「うわ、動いた」

驚く。何度も力を入れて動かしてみる。そのたびにびくんびくんと大きく跳ねる。おもしろい。

「すごい」

切ない甘い声が聞こえる。はっとして顔を上げる。

そうだ。見られていた。彼がうっとり潤んだ表情で僕のペニスを見つめていた。

女装した、まるで女の子にしか見えない彼がじっとりと粘つく視線で見つめていた。

ぞっとする。すごく恥ずかしい。身体の芯が熱くなる。まるで焼きごてを当てられたみたいだ。

ペニスに力がこもる。跳ねる。熱くなる。

いたたまれないほど恥ずかしくなって、あわてて手で隠す。触るのはなんだか怖いので、触らないようその手前に両手を広げて隠す。

彼が残念そうに指をくわえる。その仕草は、女の子が物欲しそうにするときにするものだ。でも何かが違う。彼はうっとりした目で僕の股間を見つめながら指をちゅぱちゅぱしゃぶっている。

その仕草はすごく刺激的で興奮する。なんでそんなに興奮するのかわからない。

でも同時にぞくりとする。何かやばい。おかしい雰囲気だ。この雰囲気はやばい。何かわからないけれど本能的な危険を感じる。

それが貞操の危機だということを、セックスについて何も知らない僕が理解できるはずもなかった。

「オ、オナニー、見せてくれるんでしょ。見せて。早く」

あわてて口走る。なんだかとてもやばい。この雰囲気をどうにかしないと。

彼はうっとりしたままちゅぱちゅぱ指をしゃぶっている。ようやくその指を口から引き抜いたとき、ねっとり糸を引いていた。

「そうね。オナニー、見せるんだったわよね」

彼は完全に女の子のしゃべり方をしていた。男がそんなことをすれば気持ち悪いだけだ。でも声も姿も完全に女の子の彼だと、逆に色っぽかった。

「ちょっと待ってね」

彼はベッドを下りて姿見のそばへいく。その横にある引き出しを開けて中の物を取り出す。

それはウィッグだった。黒くて長い、きれいな女の髪。

彼はそれをかぶり、姿見の前で整える。そしてこっちをくるりと向いて満面の笑顔を見せる。

「どう？」

僕はあっけにとられて見つめる。さっきまででも完全に女の子だった。それがさらに女になるなんて。きれいになるなんて。とても美しい。彼のお姉さんみたいに美しい。

「ねえ、どうなの？」

彼が甘えた声を出す。その表情は少し少しむくれていた。さっきまでよりはるかに大胆に、奔放に、女の子していた。

「すごく、きれいだよ。かわいい。すごくいい」

僕は唾を飲み込みながらたどたどしく答える。

「えへへ。うれしいな」

彼がはにかんだ笑顔を見せる。

「ずっと、見せたかったんだ。喜んでもらえてうれしい」

「僕も、ずっと見たかった」

「本当？」

「うん」

うっかり言ってしまった。彼の女装をひそかにもう一度見たがっていたことがばれてしまった。

「そう。うれしい」

彼は嫌がるふうでもなく、うれしそうだった。

彼はくるっと身を翻してから僕を見つめる。長い髪やかわいい服を見せつける。

「剥けてるんだね。それも教えようと思っていたのに残念」

「剥けてる？」

「ペニスの皮よ。ちゃんとカリ首まできれいに剥けて洗ってあるね」

「ああ。母さんに、子供の頃から剥いて中まできれいに洗いなさいって言われてたから」

「へえ。痛くなかった？」

「痛かったけれど、少しずつやったら慣れたよ」

「ああ残念。剥いてきれいにしてあげたかったなあ」

彼は指を立てて唇に当てる。なんていじらしい仕草だろう。たまらない。

彼はどうも興奮しているようだ。僕の勃起したペニスを見てから、やたら大胆になっている。その前まであんなにいらいらするほど恥ずかしがっていたのがうそみたいだ。

彼の変わりように驚く。でもなんだか、こっちのほうがりっくりくる。きれいな顔した彼には女装して奔放な女の子としてふるまうほうが似合っている気がする。

彼は長い髪を指で梳かしながら伏せ目がちに目をそらしている。その姿は思わず見とれてしまう。

こんなきれいな女の子は、彼のお姉さん以外にはじめて見る。

僕が食い入るように見つめるのを意識している。わざと視線を外し、僕が遠慮無くじろじろ見られるようにしてくれている。

僕を、誘っている。

その考えにぎくりとする。何だ。何を考えているんだ。

彼は男だ。男の僕を誘うはずは無い。

彼が僕とエッチをしたがっている？

そんなはずが無い。

エッチがどんなことをするのかよくわからないけれど、映画とかだと男女が裸で抱きしめ合ってはあはあ言いながらキスしている。

彼と裸で抱き合ってキスをする。

いや、そんなことは。彼も僕も男だ。裸で向き合ったらこんなに興奮するわけが無い。

でも服を着たままなら？

今の女装した彼なら。どう見ても女の子で、女として見られることをあきらかに喜んでいる彼となら。

キス、したい？

子供の頃一度だけしたキスみたいに。あのファーストキスみたいに。

また、女装した彼とキスしたい。

ずいぶん久しぶりに見た女装。すごく魅力的な女の子に成長していた彼。

はっきり言って、クラスの女の子なんか目じゃない。それどころか、テレビに出てくるアイドルでさえ目じゃない。

他の誰より、彼とキスしたい。

むずむずする。うずうずする。なんだろうこれ。すごくドキドキして、恥ずかしくて、たまらない。

ペニスがびくんびくんと脈打っている。彼を凝視しながら、ペニスの激しい振動が身体に響いていた。

目をそらしていた彼がこっちを向く。目が合う。僕は恥ずかしくて目をそらす。

「うふふ。かわいい」

彼がくすりと笑う。かわいいのはそっちだろうに。僕じゃない。

「じゃ、そろそろオナニー教えようか。見られて興奮しちゃった」

彼が再びベッドによじ登り座る。スカートから下着が見えそうで見えない。くそ。なんで見えないんだ。

「見たい？」

彼が上目遣いでほほえみながら尋ねてくる。

「な、何を」

「私のパンツ、見たい？」

僕は口をつぐむ。女の子の身体が気になるようになってから、女の子のパンツを見たかった。

彼も今女の子のパンツを穿いている。でも彼は男で、その股間にはペニスがあるわけで、つまり、女の子と違ってその分膨らんでいるわけで、だから、見たいかと言われれば。

「見たい」

「そう。うれしいな。じゃあ見せてあげる」

彼がスカートの裾を持ちながらひざ立ちする。そしてのそのそと後ろを向く。

「前だと、たぶんがっかりしちゃうから。後ろからね」

彼がじっと僕を見つめる。僕はこくりとうなずく。

彼が少しだけ悲しそうな表情を見せる。でもすぐにぱっと笑顔に戻る。

彼はそんなことはないと言ってほしかったのだと思う。それに気づいたけれど、いまさら言えなかった。

彼はベッドの上で後ろを向いてひざ立ちでたたずんでいる。背筋をのぼし、無言でたそがれている様はとても神秘的な気がした。

女の子にしか見えないが、実は男だということと関係あるのだろうか。他の女には無い独特の色気があった。

彼がスカートの裾を持ち、左右に広げながらゆっくりと持ち上げる。少しずつ露わになっていくふとももに目が吸い寄せられる。

きれいな足だ。

さっき着替えのときこっそり見た。裸の後ろ姿も下着姿もぼっちり見た。

なのに興奮する。服を着て、それを少しずつはだけていくのは裸とは違ういやらしさがある。

ついにスカートの裾から白い布地が見えはじめる。彼の下着。女の子のパンツ。

するすると、舞台のカーテンが上がるようにスカートを持ち上げていく。魅惑的なショーの幕が上がる。

純白のパンツが露わになる。丸出しになる。お尻が見える。

「はあ。すごい」

思わずため息が出る。ずっと見たいと思っていた女の子のパンツ。学校で、女の子がパンチラしないかとちらちら見ていた。風が吹いているときにたなびくスカートにいつも目がいていた。

それが今、見せつけられる。女の子が、自分からスカートを持ち上げ見せてくれる。

「はあ。はあ。はあ。はあ」

僕は鼻息荒く見つめる。ベッドに寄って、お尻の間近で見つめる。

僕の生温い息が吹きかかって彼が身をよじらせる。そのなまめかしいお尻のダンスによけい興奮が高まる。

「そんなに見つめられたら、私、もう」

「もう、何？」

「勃起しちゃった」

びっくりして思わず離れる。そうだ。あまりにきれいな丸いお尻について本物の女の子だと思っていたけれど、彼は男だった。

また、彼が悲しそうな目を見せる。どうも彼が男だと意識してそれを態度に出すたびに不快に思っているようだ。

彼は僕に女の子扱いされたがっている。

それがどういうことなのか、よくわからない。

僕は知識が乏しすぎる。彼が何を考えて僕に女の子として見られたがっているのかわからない。

知識としてはわからないけれど、感覚的にわかる。それはなんだかとてもいけないことで、恥ずかしいことで、でも僕の心がじくりとうずく。

必死に彼を男だと思おうとしている自分がいる。彼を女の子として見ることに言いようのない恐れを抱いている。そうしてしまったらもう取り返しがつかない予感がある。

たぶん今は答えを出せない。出してはいけない。急いではいけない。

いちいち彼を悲しませる。彼の言動がたびたびおかしくなるのはたぶん僕のせいだ。でもどうしようもない。今はどうするのが正しいのか僕にはわからないのだから。

「それじゃあ、前を向くから。……勃起しているのを見ても、驚かないでね」

僕はうなずく。実際に驚かないかどうかわからない。彼が言っているのはおそらく嫌がらないでねということだろう。それを察した僕は、彼を安心させるために言う。

「大丈夫だから。見せて」

彼は不安に歪んだ顔をぱっとゆるめる。笑顔がこぼれる。

僕が彼を嫌うわけなのに。彼は一番の親友だ。こんな恥ずかしいことをできるのは彼とだけだ。

彼は何をそんなに不安がっているのだろう。わからない。でも僕の言葉で彼は少し安心したようだ。

どうも彼はいちいち僕の言動に傷つきおびえているらしい。彼はここまで繊細だったのだろうか。女装を見せて勃起を見せる。まあいろいろと普段とは違うからしかたないのかもしれない。

彼がひざ立ちのままゆっくりとこっちを向く。

彼のスカートが盛り上がっていた。勃起している。スカートの下で、僕のペニスと同じように勃起している。

なんか、いやらしい。

どうみてもきれいな女の子なのに、股間が盛り上がっているのはすごく奇妙な感じがする。

でも嫌じゃないな。彼だからだろうか。また不安そうな顔をしている彼を安心させる。

「大丈夫だから続けて。オナニー、教えてくれるんでしょ」

彼はまたうれしそうにほほえむ。じっと見つめ合う。しばらくして、彼がぐっと唇をcanでうなずく。

スカートを持ち上げる。彼はスカートを持った両手を胸の前で合わせる。女の子がよくやる仕草だ。でも今は、スカートを持ちめぐりあげている。

その股間は、圧巻だった。

女の子のパンツが引きのばされていた。上を向いたペニスを包むそれはすごくのびていた。少ない布地からはみ出すペニスが見える。のびきってひもみたいに食い込んだパンツの左右に玉がもろにはみ出していた。

パンツの食い込んだ玉袋がいやらしい。パンツを引きのばした勃起ペニスがいやらしい。

嫌じゃなかった。彼のだからだろうか。とにかくそれを見るのが嫌だとは思わなかった。

僕が熱心に見つめるので、彼は恥ずかしそうにもじもじした。

「続けて」

僕が彼の股間から目を離さずに言う。彼の指がパンツにかかる。

パンツを引っ張り、ペニスの先から持ち上げる。パンツをのばしてペニスに当たらないようにしながらそれを下ろす。

女の子が自分でパンツを下ろす様はとてもしやらしかった。そこからペニスが出てくるのがさらに卑猥だった。

彼はひざの上までパンツを下ろすと、背筋をそらしてスカートを胸のところに持ち上げた。

彼の股間が露わになる。勃起ペニスが露わになる。

女の子がスカートを持ち上げて見せてくれている。白い服と足の肌色、そして肌とは違うより濃い色のペニス。どんな絵画よりも大胆で見事な色の取り合わせ。

目が離せない。僕は男で、女の子が好きで、女の子のあそこを見たいと思っていた。未だに女の子のあそこがどうなっているのか知らない。

なのにどうして、こんなにペニスを見てしまうのだろう。

彼が女の子みたいだからか。はじめて見る他人のペニスに対する好奇心だろうか。

どうしてこんなにも身体の奥が熱くなるのだろう。うずくのだろう。勃起してしまうのだろう。興奮してしまうのだろう。

「はあ」

ため息が出る。それが間近で見ている彼のペニスに吹きかかる。彼がびくりと反応する。

「そ、そんなに近くで見ないで。は、恥ずかしいよ」

彼は完全に女の子の声を作っている。だから女の子にいけないことをしている罪悪感にかられる。僕はあわてて後ろへ下がった。

「じゃ、じゃあ。オナニー、教えるよ」

僕はごくりと唾を飲み込みうなずいた。いよいよだ。いよいよオナニーを教えてもらえる。

「ペニスをね、手で触ると気持ちよくなるんだ。そして気持ちよさが最高に高まったらたまらなくなって射精する。おしっこのかわりに精液が出るんだ。それがオナニー」

僕はこくこくとうなずく。

「その気持ちよさが性的快感。気持ちよくするのが性的刺激。オナニーするときは自分の手で触る。手以外のことはとりあえずいいよ」

「手以外って？」

「道具を使うのとかもあるんだけど、さすがにそれはまだ覚えなくていいよ。普通はみんな手しか使わない」

「みんなしてるの？」

「してる子もしてない子もいるよ。でも俺たちの歳なら、たいていはしてると思う」

知らなかった。学校のみんなしてるんだ。

「恥ずかしいことだから、普段はしてるなんて言わないよ。だからそういう話をしたことが無くても普通だよ。エッチな話をするときには話題に出るかもしれないけれど」

そういえば、友達とエッチな話はしない。女の子に興味が出てきたけれど、すごく恥ずかしいことのような気がするのでエッチな話題は避けていた。他の子もそういう話はしない。

「手はきれいにしておいてね。汚い手でペニスを触ったら駄目だよ。かぶれたりしたら大変だからね」

僕はうなづく。手を洗ってあるから大丈夫。

「ペニスはとてもデリケートだから、乱暴に触ったら駄目だよ。強く触ってちょっとでも傷がつくとすごく痛いからね。爪はきれいに切っておいて、ひっかけないようにしてね」

僕は爪を見る。大丈夫だ。

「ペニスの触り方はいろいろあるけれど、一番普通のを教えるよ。他はまたその内教えるから。ね」

僕は素直にうなづく。

「まず、ペニスを見て」

僕は自分のペニスを見る。

「うわ！」

おどろく。先から透明な液が出てペニスにしたたっていた。

「それは先走りだよ。我慢汁とも言うけれど。教科書だとカウパー氏腺液って書いてある奴のことだよ。カウパーとも言うね」

へええ。これがそうなのか。はじめて知った。教科書じゃあなんのことかちっともわからないなあ。勃起もそうだけれど、やっぱり実物を見ないとわかりようがない。

「エッチな気分になったり、触って気持ちよくなったりしたら出るんだ。ちょっと触ってごらん」

僕はおそるおそる指先で触れてみる。ペニスに触らないよう、軽く触れるとぬるりとした。

「ぬるぬるしてるだろ。これはね、傷つきやすいペニスを保護するために出るんだ。それを亀頭に塗るようにしてごらん」

「亀頭？」

「ああそうか。えとね、この先の膨らんでいるところが亀頭、棒のところが竿、亀頭と竿の間のくびれがカリ首。そう言うんだよ。亀頭以外は正式名称じゃないけれど。竿は教科書では陰茎って書いてあるよ」

「へええ。亀頭、竿、カリ首。ふううん。なんかエッチな言葉だね」

「亀頭とカリ首はすごくデリケートだからね。乾いた手で触るとすぐに傷つくんだ。擦り切れて血が出るとものすごく痛いから気をつけて。そうならないように、ローションかこの先走りをつけて触るんだ」

「ローション？」

「えと、そのうち教えるよ。ごめん。一度にあれこれ言ってもわからないよね」

今日、はじめのうちは彼のこの物言いがいちいち勘に触った。でも今は腹が立たない。きっと彼は緊張しているんだ。こんな恥ずかしいことだからしかたがない。でも僕のために我慢して一生懸命教えてくれているんだ。今ならそれがわかる。

「うん、そのうち教えてね」

「それで、亀頭は傷つきやすいから、触るときはこう、先走りを指につけて塗るようにして軽く触るんだ。見てて」

彼は自分のペニスを見せつける。その亀頭からはもう透明な先走りがにじみ出ていた。エッチな気分になると出るって言ってたな。彼もエッチな気分なんだ。勃起しているから当然か。

二人とも下半身丸だしで、勃起して、一人は女装して、変なの。でも嫌じゃない。この雰囲気すごく楽しい。

彼は自分の亀頭に指先をつける。先走りを指で塗りながら広げるようにして亀頭全体にまぶす。

ちゅくちゅくと小さな音がする。なんていやらしい音なんだろう。耳がじんじんする。

「ん、ん、は」

彼が小さな吐息をもらす。

「ん、こんな感じ。やってみて」

僕は今見たとおりに自分の亀頭に指を触れさせる。

「ひい」

あわてて指を離す。

「な、何、今の、なんか、なんか」

「それが性的快感だよ。気持ちいいでしょ」

今のが性的快感。すごく気持ちよかった。電気が走ったみたいだった。今まで感じたことの無い、知らない感覚だった。

「続けて。亀頭を傷つけないように、先走りを塗り込んで、優しくなでるようにして」

彼の顔を見る。その顔はすごくいやらしかった。はじめに僕の勃起ペニスを見たときのような、すごくいやらしい物を見る目つき。

オナニーを見られるのは恥ずかしいことだと言っていた。たしかに、すごく恥ずかしい。

「続けて。早く見せて」

ぞくりとする。そういえば、彼はいつのまにか口調も声色も男のそれに戻っていた。

なんだかまた身の危険を感じる。彼にどうにかされてしまう予感がする。

考え過ぎかな。気のせいかな。

さっきの快感は衝撃的だった。だから続けたかった。彼に欲情されている危険を、僕は気のせいだと思うことにした。

亀頭の先に指を触れる。そこにあふれている先走りを指先につけ、円を描いて塗るように広げていく。

快感が広がる。強い快感。痺れる。まさに電気のような快感。

「んあ！」

僕は叫んで指を離した。

「気持ちいいけれど、なんだか苦しい」

「ええ？ え、あ、ああ。そうか。うん。いきなり亀頭はきつかったね。ごめん」

彼は期待に身を乗り出していたが、すんと後ろに引く。心底がっかりした声を出す。なんだか悪いことをしてしまった気持ちになる。

「ええと。ごめん。興奮して、頭ぐちゃぐちゃ。ごめん。ちょっと待って」

彼がおろおろしている。僕は彼の言葉をじっと待つ。

「ふう。ごめんね。いきなりすぎた。亀頭やカリ首はちょっと触っただけですぐ擦り切れてしまうくらい弱いんだ。俺は何回かそうして痛い思いをしたことがあってね。だから先走りとかをつけて触れば安全だって教えたかったんだ」

僕はうなずく。それは理解した。

「さっきのように亀頭を触るのを亀頭オナニーって言うんだけど、亀頭は刺激に慣れるまで時間がかかる。何度もやってみて徐々に慣れていくものなんだ。だからいきなりだと苦しくて続けられない」

たしかにあれはすごく気持ちよかったけれど、痺れるように苦しすぎて続けられない。

「だから今から教えるのは、基本的な竿オナニーだ。サオナニーって言うこともあるけどあまり言わない。やりすぎると皮がのびるっていうけれど、一番やりやすいんだ」

「それも苦しいの？」

「大丈夫だよ。苦しくないから。気持ちいいだけだから」

僕はほっとする。それならいいや。

「竿オナニーはね、こうやって、竿を握ってゆっくり上下に動かすんだ。こう」

彼が自分のペニスを握る。竿の部分を取り、ゆっくり小刻みに動かす。

「握る強さはごく軽く。動かす範囲は少しでいいよ。根本からカリ首まで大きく動かしてもいいけれど、そうすると皮がのびやすいらしい。でも気にするほどじゃないよ。君は昔から剥いてあるから皮がほとんど余っていない。さ、やってみて」

僕はおそるおそる手をペニスにそえる。さっきの亀頭みたいに痺れる苦しさがあったらどうしよう。でも大丈夫らしいし。

軽く握る。快感が走る。でも苦しくない。

きゅっと握る。少しだけ動かしてみる。

「はあ。あ！ 気持ちいい」

おどろく。とんでもない快感がペニスに広がる。じんわり熱くなる。全身に突き抜けるような快感が走った。

「これが基本だよ。握る強さとか動かし方とか自分でいろいろ試してみて。軽くゆっくり小さく動かして、徐々に強くしていったらいいよ。でもはじめは、軽く触るだけで十分気持ちいいよ」

僕は言われたとおり軽く触る。ゆっくり小さくくにくにと上下させる。

「はああ。気持ちいい。あああ。気持ちいい」

もう少し大きく動かしてみる。握ってしごくところが気持ちいい。

大きく動かす。しごく部分が大きいほど快感も広がる。皮がのびるって言われたけれど、根本からカリ首の下まで竿全体をしごきあげる。

「うわあ。うわわわ。これ。気持ちよすぎる」

まだ強くは握らない。軽く握るだけで信じられないほど気持ちいい。握る強さはこれで十分だ。

しゅっしゅとこする音がする。亀頭を触ったときと違って苦しさがまるでない。気持ちよさだけだった。こんな気持ちいいことがあったなんて。今まで知らなかったのがすごくもったいない。

「ね、こっち来て。ベッドに上がって。一緒にオナニーしようよ」

彼が自分のペニスをしごきながら甘えた女声を出す。その声にほだされてペニスを握ったままふらふらとベッドに上がる。

「同じようにして。こうして、足を広げて」

かわいい女の子が、目の前で足を広げる。スカートをめくり上げ、唯一女の子らしくないペニスをしごいている。

なんて卑猥なんだろう。なぜか嫌じゃない。相手は男なのに、女の子とエッチなことをしている気分にはかならない。

僕は同じように足を広げてオナニーする。上は服を着て、下は丸出しの二人が向かいあってオナニーする。

「私のオナニー見て。私のエッチな姿、いっぱいオカズにして気持ちよくなって」

「オカズ？」

「オナニーするときに、エッチなものを見たり考えたりすることよ。ズリネタとも言うの」

女の子が、女の子の声で、いやらしい言葉をポンポン言う。すごく興奮する。

「はじめてなのに、長持ちなのね。ああん。素敵。私なんて、姉さんにしごかれてあっという間に射精したのに」

「あ、あのお姉さんに」

「そうよ。私、姉さんにオナニー教えてもらったの。女装して、はじめて射精したの」

その光景を想像する。子供の頃一度だけ見たあのかわいい女装姿で、美人のお姉さんの手で射精させられるところが目に浮かぶ。

ああ。気持ちいい。オナニー気持ちいい。目の前で激しくペニスをしごく女の子を見るとめちゃくちゃ興奮する。それを見ながらペニスをしごくといふまでもなく気持ちよくなる。

「声、我慢しなくていいよ。あん。聞かせて。あなたのエッチな声聞かせて」

そんな、恥ずかしい。でも、声が出ちゃう。

「ん、あん、はあ。やだあ。恥ずかしいよお」

「もっと恥ずかしくなって。恥ずかしいほど気持ちよくなるよ」

もっと気持ちよくなれる。これより気持ちいいなんて想像もつかない。天にも昇る気持ちよさの中、必死にペニスをしごき続けた。

先走りがだらだらあふれる。手にとろとろとしたたってくる。手がぬるぬるしてそれでペニスをしごとくにより気持ちよくなる。ぐちゅぐちゅ卑猥な音をたてはじめる。

匂いがすごい。むせるような汗のような、でも酸っぱくて甘い。いやらしい匂いがする。変な匂い。変な気分になる匂い。なんだこれ。頭がくらくらする。

「や、あああん、エッチだよお」

「もっとエッチになって。すごくそそるわ。あなたのエッチなオナニー姿たまらなくそそる」

僕は気持ちよすぎてひざを立てる。背をそらせたり丸めたりしながら快感に悶える。

「ん、すごくエッチな姿。すごく長持ちするのね。エッチなオナニーたくさん見られてうれしい。ずっと見たかったの」

「いつもあなたのエッチな姿を想像してオナニーしていたの。やっと見られた。すごくうれしい」

彼が何かとんでもないことを言っている。でも頭に血が上っている僕はそれがどれだけ衝撃的な告白かまるでわかっていない。

「ねえ、私の姿、どう。女の子の服、似合ってる？」

「すごく似合ってる」

「女の子の髪、どう？」

「すごくきれいだ」

「女の子の声、必死に練習したんだ。どうかな」

「すごくいいよ。女の子にしか思えない」

「私のペニス、どう」

「すごくいやらしい」

「嫌じゃない？」

「嫌じゃないよ」

「私のオナニー、どう？」

「すごくエッチだよ」

「見てうれしい？」

「うれしい。すごくうれしい」

「そう。うふふ。うれしい。たくさん見てね」

彼は本当にうれしそうだ。何がそんなにうれしいのだろう。わからない。

「ねえ、そろそろ射精しそう？」

「しゃ、射精？」

「今よりうんと快感が高まって、おしっこ漏らしそうになるの。でもおしっこのかわりに精液が出るの。どぴゅどぴゅって何度も勢いよく噴き出すの。どろどろした粘っこい白濁液が出ちゃうのよ」

「白濁、液？」

「精液のことよ。白っぽいけど白じゃない、変な色なの。濁ったような、なんとも言えない色」

僕のペニスからそんな物が出るのか。想像できない。おしっこ以外の物が出るなんてなんだか怖い。

「出すときは私にかけていいからね。顔は駄目よ。でも服とか、足とか……ペニスにかけてもいいわよ」

何がどんなふうに出るのかわからないから何とも言えない。ペニスにかける。彼の含みを持たせた言い方に何か不安を感じる。してはいけないことのような気がする。

「出して。見たい。精液出るところ見たい。初オナニーの初射精最初から最後まで見せて」

彼は今日最高に淫靡な目つきで僕をじとりとにらむ。口からわずかにのぞかせる舌が小悪魔を思わせる。すごく色っぽい。なまめかしい。完全な女だ。いやらしい女の表情をしている。

それを見てこみあげる。急激に快感が高まりペニスが熱くなる。

「うわ。何、これ、あ、あ」

「出ちゃう？ 精液出ちゃう？」

「わからない。ああ。これ。すごく強くなる。ああ。んあ」

「しごいて、しごいて。うんと我慢して、最後に出すのが一番気持ちいいのよ」

言われたとおりにする。力をこめる。ぐんぐん快感が高まる。さっきまでのオナニーの何倍も強烈な快感が亀頭に集中する。

「うわわ。んんん。こんなの、もう、我慢、無理」

「かけて、かけて、私にかけて」

彼が後ろに手をついて足を広げる。スカートがはだけてそこにそそり立つペニスがびくびく脈打っている。

「か、あ、出る、なんか、出ちゃう」

「出して、出して、射精して」

射精。僕、射精しちゃんだ。

そう思った瞬間、限界を超えた。

こらえにこらえて亀頭の先端に集中していた快感が一気に爆発する。

「んあああ、あああ、ふああああ！」

びゅわっと、何かが飛び出した。

快感が全身にほとばしる。オナニーよりも、さっきまでこらえていたときよりも、さらに強烈な快感。耐えられない。信じられない。何これ、気持ちよすぎて、もう。

「んんん、ふああ、あん、んあああああ」

悶えて腰をくねくねよじる。耐えられない。気持ちよすぎる。なのに次々とその快感が押し寄せ、何度もほとばしる。出すたびにその快感が全身を貫く。汗が出る。すごすぎる。

「あ、熱い」

快感のあまり目をつぶっていた。その声にはっとして目を開ける。

僕のペニスから、噴き出していた。白濁、本当に変な色した液体が出ている。

これが精液。これが射精。

ペニスから噴火するみたいに噴き出る精液。ペニスを握り彼に向けているから彼の身体にどんどん降り注いでいく。

何度も噴き出していた精液で、すでに彼の服はべっとり汚れていた。足にもかかっていた。そしてペニスにもかかっていた。

精液があちこちに飛び散り汚されたきれいな女の子。その様はまさに卑猥そのものだった。

そこへまた飛び出る精液が降り注ぐ。宙を舞う精液がどぷどぷとかかり、汚していく。

服に染み込む精液。足を濡らす精液。そしてペニスを伝う精液。

いやらしすぎる。その光景は、もう目に焼き付いて取れないだろう。

射精の快感が止まる。僕はあわててペニスをしごく。

もっと、もっと。もっと射精したい。でもいくらしごいても、少し気持ちいいけれど射精の目もくらむような快感は二度とわきあがらなかった。

「射精はね、こうして何度か出たら終わりなんだよ」

僕のペニスをしごく手をじっと見つめながら彼は言う。

「これがオナニー。これが射精。こうして射精してから少ししたらペニスが小さくなるからね。どう。気持ちよかった？」

僕はぜいぜい息を荒げながらうなずく。

「す、すごかった。ものすごく気持ちよかった」

「そう。よかったね」

彼がにっこり笑う。

「自分でするときは、ティッシュを何枚か手に取って、それで精液を受け止めてね。べったり粘つくから床とかにつくと大変だから」

たしかに、粘っこい精液が彼の全身にべったりついている。したたり落ちない。

「触ってごらんよ」

彼の足についた精液を触る。先走りよりもぬるぬるする。

「匂いすごいね」

「うん。匂いきついからね。家でするときは終わった後換気するか、お風呂入るのもいいよ」

強烈な生臭さが漂う。すごくエッチな匂いだ。甘いようなくらくらする変な匂い。

「さて、これでオナニーは覚えたよね」

僕はこくりとうなずく。

「じゃあ次は俺の番だ。脱いで」

「え？」

彼が急に男の声に戻る。僕はびっくりして彼の顔を見る。

「俺も射精するからさ。脱いで。かけるから」

「え、何。嫌だよ」

「自分だけ気持ちよくなって終わりはないんじゃないか？」

「そんなこと言われても。精液、かけられるの嫌だよ」

「俺にかけたよね」

「あれは、そっちがかけていいって言うから」

「オナニー教えてあげたよね。気持ちよかったですか？」

「それは、そうだけど。でも」

「じゃあいいよ。脱がなくて。服を汚さないようにかけるから」

彼はペニスをしごきながらひざ立ちでにじり寄る。僕は後ろに手をついて、あたふたとあとずさる。

「嫌だ。やめて」

「足広げて。ほら、早く。それとも、無理矢理広げさせようか？」

彼の声にいらだちが含まれる。有無を言わせぬ怖さがあった。

僕はふるえながら足を開く。さっき彼がしたみたいに、後ろに手をついて足を広げる。

「ん、そのままじっとしてろよ」

女の服、女の髪、全身精液まみれ。でも声とペニスは男そのものだ。

彼が怖い。急にどうしたんだろう。逆らえない。どうしよう。

彼が激しくオナニーしながら自分のペニスを僕のペニスに向ける。僕のペニスは少しだけやわらかくなっていたけれど、まだしぼんでいなかった。

「や、やめて。嫌だ」

「君が服を脱がないから。服を汚さないように、近くでかけないとね」

彼は僕のペニスのほんの数センチ手前で激しくしごいている。僕はがたがたふるえながら動けない。

「はあ。はあ。出る。ぶっかける」

そのときたしかに、彼のペニスが膨れ上がった。射精するときは一回り大きく膨らむ。それを目の当たりにして驚いた。

「ん、ん、出る、出る！」

彼のペニスから、精液が噴き出した。

「熱い」

僕はうめいた。熱湯のような熱い精液が勃起したままのペニスに噴きかかる。熱さとぬめぬめした気持ち悪さにペニスが急速にしぼんでいく。

「あ、こら、萎えるなよ」

彼がぴしゃりと怒る。でもどうしようもない。

しぼんでいくペニスに彼がびゅぐびゅぐ精液をかけていく。小さくなったせいで全体がべっとり精液まみれになる。

「ん、は、くそ。大きいペニスにかけたかったのに」

彼がごしごししごいて最後の一滴まで絞り出す。

「ん？」

彼が顔を上げる。僕はぐずぐず泣いていた。

「あ……」

彼がうなだれる。

「ご、ごめん」

彼はうつむいたまま謝る。僕はもう我慢できずにああ泣いた。

原作利用権について

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。

原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。

原作を使用する人は、すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、同時に二角レンチのブログ「ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版」内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版

<http://stockstackstory.seesaa.net/>

プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

1. A 4 コピー用紙を用います。
2. 印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
3. 「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
4. 両面印刷で一枚につき 4 ページが印刷されます。
5. 中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
6. 二つ折りにすると完成です。

A 5 サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

(注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限りです)

印刷

プリンター

名前(N): Canon MG5200 series Printer プロパティ(P) ?

ステータス: 準備完了 注釈とフォーム(M):

種類: Canon MG5200 series Printer 文書と注釈

印刷範囲

☒ すべて(A)

☐ 現在の表示範囲(V)

☐ 現在のページ(U)

☐ ページ指定(G) 1 - 107

印刷指定: 範囲内のすべてのページ

☐ 逆順に印刷(E)

ページ処理

部数(C): 1 ☒ 部単位で印刷(O)

ページの拡大 / 縮小: 小冊子の印刷

小冊子の印刷方法: 両面で印刷

開始ページ 1 終了ページ 27

☐ ページを自動回転 綴じ方: 左

☐ ファイルへ出力(F)

ページ設定(S)... 詳細設定(D) 注釈の一覧(U)

プレビュー: コンポジット

単位: ミリ

1/54 (1)

296.97

209.97

OK キャンセル

奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名

彼の女装と僕の女装 体験版

発行日

2011 年 10 月 26 日

著者

二角レンチ

ブログ・連絡先

<http://originalmagazine.seesaa.net/>